

知的障害児就労支援の源流 「信楽学園」を訪ねて——55年の実績と課題

本誌編集委員 法政大学現代福祉学部教授 松井亮輔



今回の取材では、同学園の障害者就労支援の取り組みについて片岡卓示園長および松井邦夫進路・実習担当指導員から

結果といえる。

信楽町は昔から信楽焼でよく知られているが、現在でも町内には一五〇近くの陶器製造事業所がある。二〇〇四年一〇月の町合併で信楽は甲賀市信楽町となった。合併前の〇四年四月一日現在、信楽町の人口一万四二二三人のうち、知的障害者は四一三人で、町の人口に占める割合は二・九%と、全国に類をみない高さとなっている。これは、五五年にわたる信楽学園と町住民との協働の取り組みの結果といえる。

位置する。

信楽町は昔から信楽焼でよく知られているが、現在でも町内には一五〇近くの陶器製造事業所がある。二〇〇四年一〇月の町合併で信楽は甲賀市信楽町となった。合併前の〇四年四月一日現在、信楽町の人口一万四二二三人のうち、知的障害者は四一三人で、町の人口に占める割合は二・九%と、全国に類をみない高さとなっている。これは、五五年にわたる信楽学園と町住民との協働の取り組みの結果といえる。

立信楽学園である。

同学園は、JR草津線の貴生川駅を起点とする信楽高原鉄道の終点、信楽駅からタクシーで一〇分あまりのところにある、緑に恵まれた古い住宅街の一郭に位置する。

近年、施設から地域へ、福祉から就労へというキャッチフレーズに象徴されるように、障害者が地域で必要な支援を受けながら生活したり、働いたりすることがごく当然のこととして受け入れられるようになってきた。

そうした試みに先駆的に取り組んできたのが、戦後のわが国で、最初の児童施設である近江学園（注一）における中・軽度知的障害児の中学卒業後の就労支援施設として一九五二年に設立された滋賀県立信楽学園である。



社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団 滋賀県立信楽学園

〒529-1812 滋賀県甲賀市信楽町神山470
TEL 0748-82-0051 FAX 0748-82-0050

※2006年4月信楽学園の指定管理者として社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団が指定された。



学園のシンボル、陶製レリーフ「そだち」

信楽学園の設立経緯と歩み

話をうかがうとともに、園内の工場や園生が職場実習に行っている事業所を見学し、関係者の方々とインタビューさせていただいた。

そもそも同学園は中学を卒業しながら、就職が困難な近江学園の中・軽度の障害児に対して、「滋賀県の重要な産業の一つである信楽焼を通じて、その更生援護と福祉の措置を講ずる」ための滋賀県の事業として構想された。

この事業のため五一年八月、信楽町神山地区にあった陶器工場を買い取り、そこに翌年七月県立身体障害者更生指導所（六〇年三月廃止）と、知的障害児施設



片岡卓示園長

県立信楽寮（六〇年信楽学園と改称）が設置された。その際に近江学園から二〇名の障害児が移って事業がスタート。初代寮長には、故・糸賀一雄氏とともに近江学園の創設に携わった故・池田太郎氏（一九八〇～八七年）が就任した。

同学園の生産教育科目として窯業が選ばれたのは、前述したように、信楽焼が県の重要な産業であることに加え、「①粘土を扱うこと自体が興味を起こさせる作業であること、②協力が必要な一貫作業であること、③簡単なものから複雑なものまでいろいろな作業工程が含まれ、各々の力量に応じた作業を設定しやすいこと、④粘土を扱うことが運動機能訓練に効果が大きいこと」などによる。

ところが、同寮の開設に対しては、競合相手ができることを心配する地元業者や、何をするかわからない知的障害児が、近所で生活することを不安視する神山地区住民の反対があったことから、

「①製品は直接販売せず、業者を通じて売ること、②職員は買い取った工場の従業員を雇用し、寮で使う物品は地元から購入する」など、住民の不安解消策が講じられた。

学園創立五〇周年を記念して〇二年四月に出された記念誌によれば、地元の住民の理解が大きく進展する契機となったのは、五三年八月一四日夜に起こった信楽町の大水害である。

「泥砂の海となった町の復旧のために園生と職員は毎日出かけ、町民の中に混じってよく働いた。その真面目な園生の姿に町の人たちの目は大きく開かれ、このときから地区の人たちの園生たちへの見方が大きく変わった」という。

学園の生産教育に主として携わったのは、職員として採用された元の陶器工場の従業員（一二名）であった。しかし、当初これらの職員の人件費は国の補助対象外（現在は、公費で賄われている）であったため、学園は人件費相当額の産物収入を県に納め、その収入でこれらの職員の賃金を賄うことが求められた。

その結果、生産教育は、職員と園生が協働して市場で売れる陶器製品をつくるというビジネス・ベースで行われることとなった。最初の製品は、（駅弁のお茶用の）汽車土瓶と火鉢などで、五三年には汽車土瓶が月産約三万個、火鉢七〇〇個などがつくられた。年間売上収入は、

生産工場方式。陶器づくりで「働く力」を身につける園生たち



当時の金額で三〇〇万円以上（現在の金額では少なくとも三〇〇〇万円以上）にもなったと記録されている。

五五年ごろから徐々に神山地区の工場主から求人が出始め、やがて障害者を雇用する事業所が任意団体「信楽職親会」を六二年に結成。六五年には会則の制定など、組織として整備された。当時の会員事業所は二六社で、障害者雇用数は五四名であった。

同職親会は、「会員の事業を通じて知的障

害者の社会復帰を図ること」を目的に、「①知的障害者の職業指導及び生活指導、②知的障害者の取扱いに関する研修、③知的障害者に対する一般の啓蒙」などの事業を行っている。

職親会の協力を得て、六八年九月から園外職場実習が甲賀郡内の四事業所で開始された。

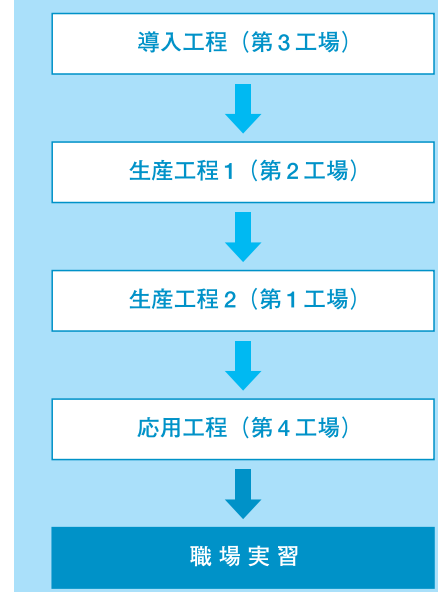
このような職親会の活動などにより、かつては学園開設に対して一番初めに反対の声をあげた神山地区は、現在では信楽町で最も障害者雇用率の高い地区となっている。

信楽学園の職業指導と職場実習

現在、同学園では一五〜一八歳の後期中等教育期の知的障害児を対象に、概ね三年間を訓練期間としている。新入生を対象とする型押し作業に始まり、製品の成型と仕上げ、最後に焼成作業が段階的に行われる。その職業指導の主な流れは、図1のとおりである。

学園内での生活指導や職業指導を通して、身辺自立、体

図1 職業指導の流れ



力、作業に対する意欲、持続・集中力といった基本的な力が養われた園生については、町内の事業所に委託して職場実習を行う。実習の時期は概ね二年目以降、一事業所の実習期間はおよそ三カ月。一人が二、三カ所で実習することで、社会



白道窯・川口隆之さん



(株)三彩の
上田洋取締役事業部長

経験の幅を広げることができるよう工夫されている。

職場実習が終わると、園生の出身地の公共職業安定所に求職登録を行う。こうした企業就労にいたるシステムは、ほぼ八五年ごろできてい

る。最近、障害者雇用支援センターや福祉園ごとに働き・暮らし応援センター(国の制度である障害者就業・生活支援センターに相当するもの)などが整備されてきたことから、学園はこれらの機関とも連携を密にすることで、卒園生の就労支援および就労後の継続的なフォローアップなどをさらに強化することができると思われる。

現在、園生の実習は信楽町内にある一事業所の協力を得て実施されているが、そのうち次の四カ所の事業所を片岡園長および松井進路・実習担当指導員に案内していただいで、訪ねた。

白道窯(社長・川口

隆之氏。従業員六名)は、食器や花器などの陶器を製造している。この三月から実習している藤田未翼さんは、実習生としては二人目。主な作業は、粘土をロールで伸ばす下準備作業である。実習が始まって半年近く経ったこともあり、手際よく作業をこなしている。

川口社長に事業所にとって実習生を受け入れるメリットについてうかがったところ、前作業をしてもらえるので助かっているということであった。同じ職場で仕事をされている松吉希美子さんは、「彼と一緒に仕事をするので癒される。彼の大ファン」だという。

(株)三彩(社長・上田知弘氏。従業員はパート一二名を含め四七名。そのうち五名は学園の卒園生)は、三和酒類(株)の「いいちこ民陶」のボトルやラジウムボトル等から、ホテルなどの注文による陶器製の浴槽まで製造している。現在学園からの二名の実習生に加え、職場適応訓練およびトライアル雇用で三名の障害者を受け入れている。同社で、約三〇年前に初めて障害者を雇用したときには負担感があったが、いまでは障害のある従業員は十分戦力になっているという。

実習生の一人、宿谷成人さんは今年二月から同社で実習している。主な作業は、いいちこボトルの仕上げ作業。学園の先輩たちからもサポートを受けながら、がんばっている。卒園生の池田浩治さんは

白道窯で実習する藤田未翼さん



勤続約三〇年、野村諭さんは勤続二七年で、現在の仕事は二人がペアとなり、いいちこボトルの成形加工。二人とも社員寮から通勤している。月額四万円の小遣い以外は、同社が彼らのために積立預金をしている。

同社にこの七月に就職したばかりの馬場和喜さんは、いいちこボトルの窯つめ作業に従事。わからないことがあれば、同じ部署の同僚に教わるという。彼も社員寮から通っている。

上田洋取締役事業部長によれば、陶器業界の景気は右肩下がり、将来の展望が見えない。そうした状況を反映して各事業所とも従業員を減らしている。したがって、業界の経営状況が好転しないかぎり、障害者も含め、雇用拡大はあまり期待できそうにない。

(株)ホワイトマックス滋賀工場(工場長・上廻正利氏。従業員はパート三名を含め六名)は、衛生手袋を製造している。

焼耐用ボトルの仕上げ作業をする
実習生の宿谷成人さん



信楽狸の並ぶ(株)かね宇陶器で働く菊池靖彦さん

四番目の事業所を訪ねる途中、たまたま立ち寄った信楽焼陶器販売会社(株)かね

同工場の本社は大阪・枚方市で、京都と大阪にも工場がある。一二年前に滋賀工場ができた翌年から学園の実習生を一名ずつ受け入れている。同工場で実習を始めたばかりの下村萌さんは、この日は体調不良で早退していたため、会えなかった。上廻工場長に実習生を受け入れるメリットについて尋ねたところ、「ロスタイムを助けてもらっている。また、同工場で現場作業をしているのは全員女性なので、体力のある男子の実習生の場合は、重いものを運んでもらえるので助かる」とのこと。

宇陶器で、信楽青年寮(注2)利用者でこれまで一〇年近く同社で働いている菊池靖彦さんと会った。彼は以前一五、六年勤めたナショナルの下請会社が倒産したため、同社に再就職したという。年齢以上で老化が早いといわれる知的障害をもつ人が六五歳近くになってまだ現役で働いている例は、ごくまれと思われる。菊池さんによれば、現在青年寮から働きに行っているのは、彼一人だという。利用者の三割近くが企業就労していたころの青年寮の様子は、九〇年に山上徹二郎監督がつくり、大変好評を博した映画「しがらきから吹いてくる風」で感動的に描かれている。

(株)常盤精機製作所(代表取締役・福田末広氏)は、東芝のホームポンプの部品等、精密機械部品を製造している。機械による加工作業を主とした企業だけに、工場内には大型機械をはじめ、各種の機械が所狭しと並んでいる。六一年に設立され、現在の従業員数はパート四名、タイなどからの研修生四名を合わせ二四名である。従業員はピーク時には三二名いたが、近年仕事が少なくなっているため減らしているという。

京都から工場を信楽に移した同社は、信楽の地に何かを返すという意味で、一三、四年前から学園の実習生を毎年二、三名受け入れている。福田常務によれば、「実習生は毎日遅刻もせず出勤し、終業まで真面目に働いている、また朝夕のあいさつがきちんとでき、会社の雰囲気をよくしている」と高く評価されている。



卒園生の池田浩治さんと野村諭さん。
ともに勤続30年、27年のベテラン職人だ



窯つめ作業に汗を流す馬場和喜さん

(株)ホワイトマックス



(株)ホワイトマックス、上廻正利工場長

この七月から同社で実習をしている仲野卓也さんは、ボール盤によるポンプの歯車加工作業に従事。彼はすでにその作業に慣れ、毎日実習にくるのが楽しみだという。同社には一二、三年前に採用された学園卒の小林竜広さんがいるが、前日作業中に不注意で足に軽傷を負い、この日は休んでいたため会えなかった。普段は、「会社を休めといわれるのが、一番こたえる」ほど彼にとって会社への存在は大きい。

四カ所というきわめて限られた事業所訪問ではあったが、それを通して学園の卒園生や実習生と事業所関係者などが双方向のよい関係を着実に築いてきていること——まさに故・池田太郎氏が述べられた「教育は共育であって、共に育つところに本当の教育の姿がある」というこ



と——が実感できた。

信楽学園の実績

五二年に学園が創設されてから昨年度末までの五五年間の卒園生の進路・就労等の状況は、表1のとおりである。また、それを八七年度から昨年度末までの二〇年間についてみると、表2のとおりである。

両者を比べると、一般就労者が六一%から七〇%に、福祉的就労者も一四%から二四%へと、

それぞれ約一割増えているのに対し、過去五五年間ではかなりいた家庭引取および施設入所者が激減したのは、グループホームや通所施設など、地域に受け皿が増えてきたためと思われる。

信楽町社会福祉協議会・信楽町まちづくり推進委員会のホームページで紹介

表1 卒園生の進路・就労等状況 (1952年度～2006年度)

	一般就労	福祉的就労	その他	総数
人数	406人	95人	164人	665人
比率	61%	14%	25%	100%

(注) その他には、家庭引取(66人)、施設入所(50人)などが含まれる。

表2 卒園生の進路・就労度状況 (1987年度～2006年度)

	一般就労	福祉的就労	その他	総数
人数	245人	84人	19人	348人
比率	70%	24%	6%	100%

(注) その他には、家庭引取(9人)、施設入所(3人)などが含まれる。

表3 信楽町在住知的障害者の企業就労内訳

業種	就労地		
	町内(人)	町外(人)	合計(人)
建設業	0	1	1
製造業	窯業	5	83
	食品	2	5
	機械器具	13	24
	その他	0	1
	計	20	113
運輸通信業	0	1	1
卸売・小売・飲食	2	4	6
サービス・福祉	5	0	5
産業廃棄物処理	2	0	2
合計	102	26	128

されている信楽町に住む知的障害者の企業就労状況(〇四年四月一日現在)は、表3のとおりである。

信楽町に住みながら町内外の企業で働いている知的障害者の約三分の二(町内だけでみると四分の三強)が、窯業関連事業所の就労者で占められる。陶器業界がおかれている現況を考えると、これまでそれに大きく依存してきた信楽町およびその周辺に住む知的障害者の就労先の見直しが求められよう。

(株)常盤精機製作所



就労者のフォローアップ

九六年に発覚したサン・グループ（滋賀県五箇荘町）事件（注3）を契機に、九七年度より障害者の人権を守ることを目的に、滋賀県障害者権利擁護相談室が設置されるとともに、信楽学園などの卒園生のフォローアップのために嘱託職員が配置された。

このフォローアップの一環として、学園では〇五年一〇月～一二月に〇〇年度から〇四年度の五年間の卒園生七〇名を対象に、職場での現況などを把握するためのアンケート調査を行っている。有効回答四七名（回収率六七％）の就労状況は、企業就労三三名（七〇％）、福祉的就労一名（二三％）、無回答三名で、給料は一万円未満六名、一～三万円二名、五～七万円三名、七～九万円九名、九～十一万円二名、十一万円以上九名、無



(株)常盤精機製作所、福田末広社長

回答六名となっている。

福祉的就労者は一万円未満が過半数を占めると思われるが、企業就労者も七～十一万円の者が全体の三分の二近くを占める。障害基礎年金を受給している者が四七名中一二名（約二六％）にすぎないことを考えると、企業就労している者でも、給料だけではグループホームなどを利用しながら地域で自立した生活を送ることはかなり厳しいと思われる。

職場で困っていることとしては、「コミュニケーションがうまくとれない」、「対人関係がうまくいかない」などが多い。学園に対しては、何らかの形で定期的にフォローアップすることを期待している。

翌年〇一年度から〇五年度の卒園生八一名を対象に行われたアンケート調査では、八一名中一度離職した者は一九名（二三％）で、その大部分は再就職している。離職の原因は、仕事上の問題よりも生活上の問題の方が大きい。つまり、仕事ができても生活面で安定していないと就労の継続は難しいといえる。

信楽学園の現状と課題

学園の〇七年四月一日現在の利用者の年齢別および障害程度別状況は、表4および表5のとおりである。これらの表からわかるように、学園は現在のところ一

表4 年齢別在園児数

年齢	15歳	16歳	17歳	計
男	8人	14人	15人	37人
女	3人	4人	5人	12人
計	11人	18人	20人	49人

表5 障害程度別在園児数

障害程度	重度	中度	軽度	計
男	0人	7人	30人	37人
女	0人	2人	10人	12人
計	0人	9人	40人	49人

五～一七歳の中・軽度（特に軽度）の知的障害児に対象を絞り、三年間にわたる職業指導・生活指導を実施することによって高い就職率を達成してきたといえる（注4）。

定員六〇名に対し、現在一一名の欠員がでている主な理由は、「昨年度施行された障害者自立支援法により、障害児施設についても従来の措置制度から契約制度にかわり、一割負担が生じたこと（も）とも激変緩和措置で実際の負担額は相当軽減されているが、そのことは必ずし



片岡園長の案内で学園を見学する筆者（写真左）



編集委員から 松井亮輔

今回の取材を通して、近江学園や信楽学園にかかわった先駆者たちが残した大きな足跡をたどることで、彼らが目指したことから多くのことを教えられた。紙面の都合でそのごく一部にしか触れられなかったことが惜しまれる。

もよく知られていないこと）や、滋賀県内に〇六年度には長浜高等養護学校、〇七年度には甲南高等養護学校が相次いで開校されたことなどが影響しているものと思われる。（片岡園長談）

しかし、学園の定員割れは今回初めて発生したわけではなく、九八〇一〇一〇年度にも生じ、その際にも学園のあり方について検討がなされている。

利用対象者を一五〜一八歳という年齢層や中・軽度障害者に限定している条件



常盤精機製作所で実習する仲野卓也さんに声をかける信楽学園の松井邦夫指導員（写真右）

を緩和することなどで定員の確保は可能と思われるが、そうした条件緩和と高い就職率の確保を両立させることは容易ではないと思われる。それが、学園が直面している大きな課題のひとつである。

ここでもう一度強調しておきたいのは、学園卒園生の就職実績である。全国の知的障害高等養護学校卒業生の就職率（昨年度末）が二五・三％にとどまっているのに対し、学園のそれは七〇％と比べて高く、しかも平均勤続年数もかなり長い。

教育の目標は、必ずしも就職だけではないが、次のステップに確実につなげ、それを継続するということは、知的障害者が地域で安定した生活を送るうえで非常に重要なことである。その意味でもこれまで学園が実践してきたことは大いに

評価されてよい。今後学園がこの実績を維持・発展させていくために必要な財政的、人的支援が、さらに強化されることが望まれる。

おわりに

学園および信楽町の取り組みを参考に、石川県加賀市の県立錦城養護学校でも、「授業を通して子どもたちが卒業後に九谷焼を職業とできるか適性を検討していく」。そのために加賀市は、市をあげて信楽学園を視察したと聞いた。学園や信楽町の取り組みがこうした形で全国にひろがっていくことを期待したい。

（注1）四六年開設。四八年一月、児童福祉法施行に伴い、滋賀県立児童養護施設兼知的障害児施設となる。初代園長は、「福祉の父」として知られる故・糸賀一雄氏（一九一四〜六八年）。

（注2）五五年一月、二〇歳以上の信楽学園利用者の受け皿として、全国で初めて設置された成人の知的障害者入所施設。当初は無認可施設。その後、六九年に社会福祉法人しがらき会が設立され、同青年寮は六〇年制定の知的障害者福祉法に基づく認可施設となる。現在の定員は、更生施設三〇名、授産施設五五名を合わせ八五名。

（注3）知的障害者二〇〜三〇名を雇用する肩パッド製造会社で、一〇年以上にわたり知的障害者をもつ従業員に対してさまざまな虐待や障害基礎年金の横領が行われた事件。被害者の中には学園の卒園生も数名いる。

（注4）障害程度は、ストリートに職業能力にリンクするわけではない。障害程度は軽くても、仕事への取り組み姿勢や対人関係上、あるいは生活上の問題で就職にはなかなかつながらない場合も少なくない。その意味では、学園は障害程度が比較的軽い人を対象としているからこそ高い就職率を維持できるといえる見方は、必ずしも当てはまらない。